天理参考館から（27）

お洒落と髪飾り

天理参考館学芸員
幡鎌　真理　*Mari Hatakama*

今回は「お洒落」について考えたい。新型コロナウィルスの感染拡大が人びとを疲弊させる状況が、もう２年以上続いている。「不要不急」という、基準が曖昧な言葉もしばしば耳にするようになった。「お洒落」は「不要不急」の範疇に入れられてしまうのだろうか。マスクをつけるからフルメイクは「不要」で、ウィンドウショッピングに出かけるのは「不急」と断じられるものなのか。歴史を振り返ると、激動の時代に、一気に「お洒落」が花開いた事例もある。幕末に、それまでなかったような手の込んだ簪（かんざし）が一斉に出回った。尊皇攘夷の血なまぐさい状況下、地震や流行病が多発するなかでも「お洒落」をしても「ええじゃないか」となったのかどうか、不思議な現象である。

天理参考館では、新春１月から「きれいになりたい―櫛（くし）・簪（かんざし）・笄（こうがい）とお洒落－初公開百助コレクション」と題した第88回企画展を開催した。浅草寺門前の老舗化粧品店百助のコレクションが一括寄贈され、整理調査を終えて公開するに至った。天理教深川大教会の仲介を得て、髪飾りの貴重なコレクションを収蔵できたおかげである。その櫛、簪、笄の繊細で美しく、きらびやかな細工に目が眩む。「お洒落」＝「着飾る」とイメージする人が多いかもしれない。「着」で連想するのは着る物、洋服や着物だろうが、「飾」の文字には髪の飾り、ひいては髪の毛そのものの意味がある。“髪は女の命”という表現が現在でも健在かどうかわからないが、戦前はもちろん、江戸時代までは自明のことだった。調べていくと、髪はとてもセクシャルなものと認識されていたことがわかる。禿げて髷が結えなくなったら引退で、白髪が生えれば老いと死期を自覚し、煩悩を取り去るために僧は剃髪した。髪の状態と、子孫を残す大切な生殖機能はリンクしていた。

髪飾りについて述べる前に髪形を概観したい。昔は出産７日目頃に赤ん坊の体毛を剃り落としていたが、これはお産の血の穢れを祓うためだった。その後も３歳ぐらいまでは髪の毛を削ぎ落とし、男女とも丸坊主の幼児の姿が絵巻や刷物に登場する。新陳代謝の盛んな子どもの髪形としては、高温多湿な日本では理にかなったものだったのだろう。３歳になってはじめて髪を伸ばすようになるが、髪を削がずにそのまま置いておく意味から「髪置き」と呼んだ。ここから髪を伸ばすと、額の髪が垂れて目に入るので「目刺し」の髪形、つまり現代のおかっぱ頭になる。その後、男子は４、５歳で髪を束ねた茶筅にしたり、中剃りをして若衆髷のように結ったりと身分によって髪形は異なった。３歳、５歳、７歳と通過儀礼に髪は深く関わった。これが今も七五三につながる。長寿と健康、繁殖力を同時に願ったのだ。男子は元服時に髷を結うが、女子は男子の元服にあたる14～15歳で「髪上げ」をする。下ろした髪を一人前の女性になった証拠に結い上げた。もし「髪上げ」に足るほど伸びていなければ男女の契りは結べない。「髪上げ」は成人と同時に結婚が可能となったことも意味する。「髪上げ」をしていない女子に手を出すのは現代で言うところの児童福祉法違反で、公序良俗に反する恥ずべき行為だった。もっとも、それをしたのが『源氏物語』の中の光源氏で、対するまだ幼い紫の上の驚愕が短く描写されている。髪に触れられるのは夫だけで、平安時代に黒髪を敷いて寝ることは、恋人が夢にあらわれ、夢の中で会えるように願った行為である。「寝覚めに乱れそめた黒髪」は意味深長な表現で、なるほど「髪は女の命」という言い方に合点がいく。

このように大切な黒髪を飾るのが髪飾りである。黒髪そのものに価値を見出した平安時代以降は垂れた髪に飾りを挿すことはできない。いわゆる日本髪のかたちが生まれる江戸時代に、飾り櫛をはじめ、笄、簪が出現する。もっとも櫛も笄も簪も古代から存在した。櫛は本来髪を梳（す）くための道具であるが、古墳時代の女性像埴輪では髷を留めるように前から挿されている。この場合は縦長の形状で、歯の部分が長くなっている。簪や笄は束ねた髷を冠と結合するヘアピンの役目を果たしたが、埴輪を見ると櫛も簪に近いはたらきをしたことがわかる。冠をかぶると熱気が籠もって痒くなるという。簡単に手を入れて掻くことはできないので、そのとき冠に挿し込んで掻くのが笄だった。笄（こうがい）の呼称は頭掻き（こうかき）に由来すると江戸時代の文献にも残っている。これら実用具が江戸時代に装身具に転換したのである。当時は身分制社会であり、身分や階層によって髪形は固定されている。武士か町人か、大名の奥方か下級武士の妻女か、未婚か既婚か、既婚でも子どもがいるかいないか等々細部にわたって規定された。一見して「どういう立場の人」か明白な、個人情報全面開示の時代である。そのような社会でも女性のお洒落心は抑え難かったにちがいない。その場合他の人とどう差別化するか、髪飾りで突出しない程度に自分のセンスを発揮するしかなかったのではないか。幕府は庶民が贅沢することを極度に嫌ったので、鼈甲や金銀珊瑚を多用した髪飾りの使用を何度も禁止した。「何度も」とは、従わない場合が多かったことを示す。図１は鯉の頭と胴体が分かれており、背びれや尾びれも動く仕掛簪だ。頭を動かすと鯉の胴体がゆらゆらと揺れ、まさに泳いでいるように見える。このような精緻で高度な技術が最高に円熟したのが幕末だ。幕府の力が弱まり、人びとの意識が変化を始め、心を縛っていた忖度から解放されて徐々にお洒落に目覚めたとは考えられないだろうか。明治時代にはいるとそれは一層加速し、お金を積めば豪華な髪飾りを手に入れてお洒落を楽しめるようになった。経済力という新たな制約が生まれたのかもしれないが、自由な選択肢が広がったことは間違いない。

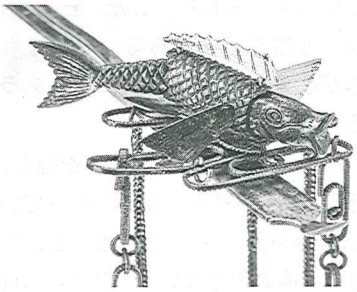

図１　鯉の滝登り金銀びらびら簪　長19cm
江戸時代末期（天理参考館蔵）

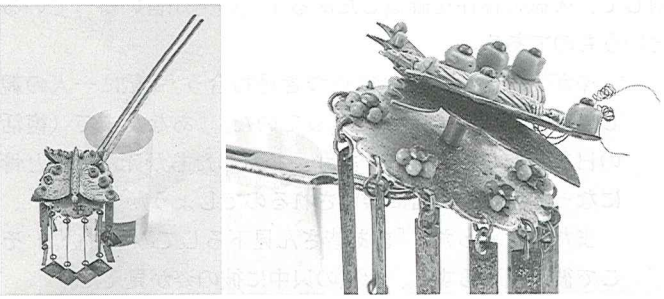

図２　珊瑚飾り蝶びらびら簪　長20.5cm　江戸時代末期（天理参考館蔵）
蝶の前羽と後羽をひと続きにしたうえで、表裏２枚に作り出し、下に花形の板を置いて飾り全体を簪の先端に支柱でつなぐ。完全に固定されていない板の不規則な傾きとそれに連動しない蝶のゆらぎが奇しくも蝶が羽ばたく様子を表現する。大振りな揺れる飾りとびらびらの垂れ飾りの上下の異なる動きが人目を引く簪だ。